

# 震災リゲイン プレス 第2号

## Press

発行元：震災リゲイン 発行人：相澤久美 編集人：高木伸哉 編集部／〒106-0044 東京都港区東麻布2-28-6 tel／03-3584-3430 fax／03-3560-2047



リ  
topic

## 女川町・自宅跡地で灯す「迎え火」

更地になった我が家に皆が集まり、語らう新たな行事

写真=小山田裕彦

2012年8月13日。夕暮れ迫る宮城県の港町・女川町で、ひとつ、またひとつと小さな火が灯り始めた。東日本大震災で甚大な津波被害を受けた同町・鷲神地区を中心にした、「迎え火」の一夜の始まりだ。

小さな焚火セットによる火を囲むのは、かつてその場所で暮らした家族たち。瓦礫撤去により更地となったそれぞれの我が家に腰を下ろし、灯を囲んで思い思いに語り合う姿がそこにあった。

「迎え火」とは、主にお盆に先祖の霊を迎え入れるためにたく野火。だがもともと、この町に地域ぐるみでそれを行う風習があったわけではない。きっかけは、同町で漁業を営んできた女川町観光協会会長の鈴木敬幸さんと、震災後に同地と交流してきた京都の美術家・小山田徹さんらの、ある夜の語り。「今度のお盆は皆に声をかけて、自分たちの家があった場所で共に火を灯そう」というアイデアが生まれた。

それが年初のこと。以降、地元の女川町復興連絡協議会を中心に、復興を目指す各世代の動きが合流して準備を進め、この日を迎えた。鷲神は商店や行政施設も集まる中心地区で、港に面した平地のため、ほとんどが波にさらわれた。「迎え火」の受付本部は、かつて町のスーパーがあった場所。そこで焚火セットを受け取った各家族は、わずかに建物の基礎跡が残る自宅跡に向かい、焚火を囲むひとときを過ごす。

「迎え火」当日、協力者たちに挨拶する女川町復興連絡協議会の鈴木敬幸さん(右)と岡裕彦さん。写真=草本利枝

同区をまとめた「区長さん」のお宅や、長年旅館を営んできた一家。焚火の側で花火に興じる子供を眺める三世代

家族。自宅跡地が荒れているため隣家に合流した女性は「久しぶりにご近所同志、顔を合わせて話せるのもいいものです」と語る(彼らは複数ある仮設住宅地に分散している)。単身静かに訪れ、参加者と声を交わす若き須田善明町長の姿もあった。震災後にコミュニティカフェを営む岡裕彦さんらは、港を見下ろす店先で縁日を開き、眼下の灯たちを見守る。

更地に広がる夜。各々の迎え火の周りには、かつての食卓を囲む家族の風景が浮かび上がるような、不思議な光景があった。もちろん、失われた建物、命は戻ってこない。それでも、焚火はしばし鎮魂と再生の灯となり、震災後1年半の町でそれぞれの「我が家」を照らした。

参加家族は合計83世帯、324人。合流した知人たちや、各地のボランティアも含めると、約500人がこの迎え火と共に感じた。ボランティアへの食事を寄付した「はらから福祉会」、参加家族の子供へ手製菓子を贈った「いぶき福祉会」という、ふだん社会の支えが必要とされる障害者たちの集う場からも「支え」のあったことを記しておきたい。

復興計画では住居の高台移転が原則で、この低地はそれ以外での再利用が検討される。新たな形での暮らしの再生が、この町の課題だ。だからこそ、失われた命を尊び、震災を語り継ぎ、そして新たな訪問者にも開かれた「迎え火」を年中行事として育てたい。それが開催者たちの願いだ。遠い未来も「昔こんなことがあって、女川の迎え火が始まったんだよ」と、語り継がれるように――。

女川さんま収穫祭(東京編)

10/20(土) 日比谷公園(東京都千代田区)

地元恒例のお祭りが、都での瓦礫受入処理への感謝も込めて東京出張。名物のさんまと共にやってくる。



人のつながりが復興を支える

新しいまちづくり

取材・文 中川哲雄

前回に続き、3・11の津波で大きな被害を受けた宮城県南三陸町・伊里前集落でのお話です。地元で長く牡蠣養殖業を続けてきたひとり、千葉正海さんが体験した、復興への一歩を支える人々のつながりを紹介します。

### 第2回 「ここ、子どもたち入学するよね」

元祿の頃から何代にもわたって子孫を増やしてきた伊里前ですが、七十七あつた世帯のうち、津波で七十四流されました。震災から少しして道も通れるようになって、でも夜に伊里前があつたところを車で走っていると、分からないんですよ。灯りがなくて真っ暗で、知っている建物もみんななくなっていて、そうすると自分が子どものときからずっと暮らしてきた町でもここがどこか分からなくなる、そういうことになってしまふんだなって知りました。

まあそんなふうには道だけはきれいになつても、町の中の瓦礫はなかなか片づかなくてどうにもならない。中でも私が気になつたのは、町の小学校でした。津波はその小学校の一階までやってきて、当然校庭にも瓦礫が流れ着きました。毎日子どもたちがそこを海を見ていた校庭です。それが瓦礫だらけになってとても遊べる状況じゃない。そんなときにRQ市民災害救援センターから本部の広瀬さんが来てくれました。「千葉さん、ここ、四月になったら、子どもたち入学するよね」

「つて、広瀬さんが私にそう聞くんです。「んだ、広瀬さん、ここ、なんとか、ボランティアのほうの力でやってくれねが?」と私は聞きました。そうしたら広瀬さんが、「やりませう」って言うてくれたんです。「千



葉さん、何でも言うてくれ、この町が綺麗になるなら俺たちは何でもやるから、何でも要求してくれ」

その言葉を聞いてもう、涙を浮かべるやら、自分でそれまで一人じゃできなかったことが一杯あつて、でも、彼が言うてくれたその一言で勇気づけられました。それから広瀬さんたち、RQセンターのボランティアの人たちが、三日かけて、校庭を裸足で歩いてもケガしないくらいに状態にしてくれたんです。小学校だけじゃなくて、幼稚園や中学校、とにかく子どもたちが入るところ、だけれどやっぱり自分らだけでは手が回りきらなくて、そこでもRQの人たちが、下水のドベを出して真水十トン使つて側溝をきれいにしてくれました。皆さんのおかげで、町がきれいになっていきました。(談)。

こうして外の人たちの力も借りながら日々の暮らしを紡ぎなおす歩みは、住まいや仕事、子どもたちの学校、などなどどれをとつても、一足飛びに進むものではない。次号からは、また別の地域に焦点を当てつつ、復興に向かう各地の動きを引き続き追っていききたいと思う。

## ライフライン復旧までのトイレ事情を劇的に改善する

震災などの大災害で上水道が止まった場合、復旧までにかかる日数は最短で30日、最長で90日に達する。

生活に関わるすべてのインフラが遮断された際、大きな問題になるのがトイレ。上下水道が機能しなくなると同時に、水洗トイレは使えなくなる。避難所には工事現場やお祭り会場などで使われているような仮設トイレが用意されるものの、野外に設置されるので、お年寄りの使用や夜間の使用には困難が伴いがち。特に歩行に難のあるお年寄りの場合、介助が不可欠だ。さらに、臭いの問題は非常時だから仕方ないとはいえ、やはり耐えがたいものがある。その結果「なるべくトイレに行かなくて済むように」と水分を取らない人がお年寄りを中心に増え、結果的に脱水症状になる人も少なくない。

トイレ問題は避難生活の中でも、ある意味で最重要課題なのだ。

「ラップボン」は、バッテリー電源を必要とするものの、臭いや衛生面はもちろん、アクセスのしやすさに関しても、避難所でのトイレ事情を劇的に改善できる自動ラップ式トイレだ。

「ラップボン」の内部には5層構造で臭いをとじ込めるポリエチレンのフィルムが装填されており、用を足した後は、自動でフィルムの

端を熱で圧着し密閉パックしてしまう仕組み。臭いをシャットアウトし、フィルム交換(50回分)以外はメンテナンスなしで、衛生的な環境を保つことができる。用を足す前に、凝固剤を



組み立てトラック型自動ラップトイレ「ラップボン・トレッカー2」(168,000円)。プティックの更衣室ほどの大きさの個室を作れる「danbee」(32,000円)、手すりと背もたれを兼ねた「ラクアーム」(63,000円)との組み合わせも可能。価格はいずれも税込。

入れるので排泄物の容積は減り、それらは可燃ゴミとして廃棄することが可能だ。手軽に作れる段ボール製の個室空間「danbee」と組み合わせると、瞬時にして快適なトイレができあがる。ストレスの多い避難所暮らしの中、これが実は

### 自動ラップ式トイレ「ラップボン」 日本セイフティー株式会社

非常に貴重な「ほっとできる空間」。

「ラップボン」を製造販売する日本セイフティー株式会社は、2007年の能登半島地震では50台のラップボンを提供、中越沖地震では100台を持ち込み、支援を行っている。2011年の東日本大震災でもこの経験を活かし、震災翌日に災害対策チームを立ち上げ、ラップボン「絆・プロジェクト」を開始。3月27日には宮城県に入り支援活動を開始している。気仙沼、南三陸、女川、石巻、東松島、福島県いわき市などの避難所・計50か所に、150台のラップボンを設置している。

東日本大震災以降、防災への意識は高まっているものの、トイレの備蓄に関しては万全とはいえない。日本セイフティーでは製品のPRを通して、自治体、病院、学校、民間企業への備蓄を呼びかけている。

問い合わせ先：  
日本セイフティー株式会社 ラップボン事業部  
〒112-0002 東京都文京区小石川1-3-11  
イトーピア小石川梅津ビル  
電話：0120-208-718  
http://wrappon.com

あなたにも  
できる  
復興支援!

## 被災地に創出したい 本当の雇用の場

【南三陸町復興推進ネットワーク】  
http://msrfsnet.jimdo.com/  
電話: 0226-25-9350



ぼくたちは「フルサトファンダメンタリスト」なんです…

支援金  
を送る

【寄付先】七十七銀行 志津川支店 普通預金 5208254  
一般社団法人南三陸町復興推進ネットワーク

## 収納の少ない仮設住宅に棚を!

【tanaproject/たなプロジェクト】  
http://tana-project.blogspot.jp/ 電話: 090-5193-1721



「仮の住まいだけでできるかぎり普通の暮らしを送れる場に」[少ない収納を増やしたい]。そんな想いのもと、東日本大震災により仮設住宅に移り住んでいる人たちが自分たちの棚をつくるプロジェクト。ワークショップで一緒に行なう棚づくりがコミュニケーションの場づくりにもなる。重ねても分けても使える引出しつきの棚を、段ボールで組み立てていく。お母さんや子どもたち、年配の方も気軽に参加し、自分だけの棚づ

参加  
する

ワークショップの情報は  
上記ウェブサイトです

支援金  
を送る

【寄付先】三菱東京UFJ銀行 用賀出張所  
普通預金 0037111 タナプロジェクト

## 「放課後学校」で被災地の学習支援

【NPO法人カタリバ】 http://www.collabo-school.net/ 電話: 03-5327-5667

コラボ・スクールとは、被災地の子どもたちが放課後にじっくり学ぶための居場所。彼らの仮設住宅は狭く、兄弟がいると宿題をするのも困難なほどだ。そこで放課後に子どもたちが集う場を設け、指導をしている。主に首都圏で「学校に社会を運ぶ活動」を行うNPOカタリバでは、震災を受けて女川向学館(宮城県女川町)と大槌臨学舎(岩手県大槌町)を運営中。いずれも激しく

被災した地域で、それぞれ約200人の生徒が利用する。地域施設を会場に、先生の多くも被災した元塾講師等だ。これまで寄付金を支えに運営してきたが、2012年度から一部を有料化。保護者たちの提言や、長期的な地域経済の発展に与える影響も考慮しての決断だ。それでも、地元雇用スタッフの最低限の報酬、送迎バス、冬季暖房代等、まだまだ支援は必要な状態だ。

支援金  
を送る

【寄付先】三菱東京UFJ銀行 中野支店 普通預金 0044500  
特定非営利活動法人NPOカタリバ 東北復興事業部 理事 今村久美

「ふるさとに戻りたい」という当たり前の思い。でもそのために大切な仕事は未だ被災地では臨時的なものばかり。それさえ今の「震災ブーム」が去ってしまえばどうなるか分からない。長期的な視野に立った雇用のために必要なのは、人のつながりや豊かな自然など、元々ある地域資源から仕事を創出していくことだと考えた南三陸町復興推進ネットワーク。地元出身の若者を中心に、ふるさと学習や青年興業種勉強会、さらにインターンシップの学生たちの「外の目」も呼び寄せ、自分たちの「資源」を新しい仕事につながる形で再プロデュースしていく挑戦を始めている。「ふるさとに戻りたい」は「ふるさとを戻したい」。実は震災前から失われつつあった「ふるさと」を、今回を機にマイナスをプラスに転じて本当の雇用の場にしようとする若い力を応援したい。

くりに夢中になって取り組む姿が見られる。宮城県や岩手県などの仮設住宅の他、東京その他の地域でもワークショップを開催し、被災地までなかなか足を運べない方たちからも「楽しいうえに支援の役に立てるこういう活動は大切ですね」と好評。避難所での間仕切り機能も果たせるこの棚づくりは、今後起こりうる災害も視野に入れたプロジェクトだ。



シンプルな寄付の他にも、毎月サポートなど多様な支援の形がある。詳しくはウェブサイト参照。

## 被災地の子ども向けホースセラピー

【NPO法人インフォメーションセンター】 http://www.ryufo.com/ 電話:0854-42-2833

一定期間を馬と共にすごし、世話をするなど関わり合う中で、参加者が育ち・育てられるホースセラピー。同NPOの寄田勝彦代表も、かつて自らの心の苦境を馬とのふれ合いで救われた。これを原点に多様な課題を持つ人々を対象に「命によりそう牧場暮らし」を各地で開催。東日本大震災後は、被災地の子どもへの保養・成長を願って彼らを招き始めた。当時の衝撃から現在の苦境・

偏見まで、小さな心にかかる負担は大きい。「でも馬は人間側の事情におかまひなくシンプルに生きています。あらゆる人が馬の前では平等です。そして大きく賢いけれど、弱い生物でもある。そんな彼らとの関わりが、生きる力を得る機会になれば」と同NPOの坪井香保里さん。すでに沖縄、新潟、島根で開催し、被災地に近く安心して参加できる会津若松での牧場づくりも進行中。

支援金  
を送る

【寄付先】楽天銀行 第一営業支店 普通預金 7087010  
特定非営利活動法人インフォメーションセンター 3.11 世界を変えるプロジェクト

## 震災復興を 応援しよう!

— チャリティ通販 —

### 2度の津波を乗り越えた 三陸の銘菓

【かもめの玉子】(岩手県大船渡市)

今年で誕生60周年。しっとりほくほくの黄身餡をカステラ生地とホワイトチョコで包んだ、風味豊かなお菓子です。チリ地震津波に次いで今回の津波でも流された店の大看板は、奇跡的に発見され復活しました。



12個入り 1,323円 20個入り 2,205円  
ご注文は⇒ さいとう製菓株式会社  
電話: 0120-311-005  
http://www.saitoseika.co.jp

### 思い続ける大切さを

【手作りナンパリンググラス】

(奈良県奈良市)

毎日使う食器を通して、被災地を思い続けたい。そんな願いから生まれた手作りグラス。側面には製造順に番号が刻まれ、そのケタが増えグラスを一周するまで作り続けたいそうです。売上の一部は被災者義援金に寄付。

※手作りゆえ、在庫状況により時間がかかることもあります。  
※グラス番号の選択はできません。



1個 1,500円 (直径約8.5cm高さ約10cm)  
ご注文は⇒ くるみの木  
電話: 0742-20-4600  
http://www.kuruminoki.co.jp/



### 本物の味を楽しんで 被災地支援を

【銀鮭寒風干し】(宮城県女川町)

軒先で冷風に晒し、鮭の旨味を凝縮させる東北伝統の「寒風干し」。これを長年の研究の末に独自の「寒風庫」で実現させ、鮭本来の美味しさを最大限に引き出しました。農林水産大臣賞に輝く逸品をお楽しみください。

6切1箱 3,150円  
ご注文は⇒ 女川海匠 和田商店  
電話: 0225-54-2266

※表示価格はすべて税込です(送料別)。

### 気仙沼誇りの味と技術を守り抜く

【ふかひれ姿煮/ふかひれ濃縮スープ】(宮城県気仙沼市)



ふかひれの水揚げ量日本一を誇る気仙沼。培われた加工技術を絶やさぬよう、被災地応援ファンに参加し多くの支援を受けつつ、基幹商品から製造・販売を再開しています。思いの詰まった伝統の味をどうぞ。

ふかひれ姿煮(150g) 1,260円  
ふかひれ濃縮スープ(200g) 840円  
ご注文は⇒ 株式会社石渡商店  
電話: 0226-22-1893 http://www.ishiwatashoten.co.jp

### 漆黒の雄勝石から削り出された香立て

【硯石香立て】(宮城県雄勝町)

雄勝は日本有数の硯石の産地で、その歴史は600年にも及ぶ。震災の甚大な被害により途絶えかけた伝統産業も、地元の人々の懸命な努力により復活の途上。その硯石で作られた香立ては、自然の風合いを残す素朴な逸品。



1個 2,000円 (天然石使用のため、形状、サイズはすべて異なります)  
ご注文は⇒ 雄勝硯生産販売協同組合  
電話: 0225-57-2632  
http://www4.famille.ne.jp/~suzuri/

### 新鮮な魚の旨味と風味を凝縮

【高政 かまぼこ詰合せ】

(宮城県女川町)

女川復興を、新規雇用や他企業支援の形で牽引する創業70余年のかまぼこ店から、笹かま、あげかま他の詰め合せを。地魚を中心に新鮮素材を厳選、つなぎを極力排除し、魚の旨味を伝統製法でとじ込めた逸品です。



製造過程を工場見学で公開しているのも自信の表れ。

1箱 2,877円 (商品番号: SAP-18)  
ご注文は⇒ 株式会社高政  
電話: 0225-53-2854  
http://www.takamasa.net

### 編集後記

毎月東北に通い、各地で様々な人の話を聞いて歩いている。訪ねる市、町、村、浜ごとに状況は異なり、小さな集落でも個々人の考えや想いは異なる。また国、企業、各種団体等は、ある枠組みの中で支援を考えるが、支援する側とされる側、双方の展望のスケールが違いすぎ、そのギャップを埋める手だてがない。この状況に簡単な解決法はないが、この紙面を通じ、支援を要する小さき存在に対して、小さき支援が沢山実現すれば、それは大きな力になると信じている。(相澤久美)

《ご意見、情報もお待ちしています》

一般社団法人 震災リゲイン 震災リゲインプレス編集部  
〒106-0044 東京都港区東麻布2-28-6  
電話: 03-3584-3430 FAX: 03-3560-2047

### 活動支援金の寄付のお願い

震災リゲインでは、下記活動への皆様の手助けを願っています。ご検討下さると幸いです。

- 震災リゲインプレス(この情報誌)の制作
- 震災復興情報サイト「震災リゲイン」の運営 http://www.shinsairegain.jp
- 復興支援者と支援先を結ぶ「つなぐプロジェクト」

【ご送金の方法】

1. ゆうちょ銀行の口座からお振り込みの場合、つぎの口座宛にお願いします。  
【金融機関名】ゆうちょ銀行 記号: 10000 番号: 82078551  
口座名義人: シンサイリゲイン
2. ゆうちょ銀行以外の口座からお振り込みの場合、つぎの口座宛にお願いします。  
【金融機関名】ゆうちょ銀行 店名: 〇〇八(ゼロゼロハチ)店  
口座番号: 8207855 口座名義人: シンサイリゲイン